

ニラの促成栽培

中原 忠 夫

ニラは一月から四月にかけて、青物野菜の不足する時期に促成して、店頭を賑わし、既に季節ものとして重要なものとされております。ニラは輸送によつて品質が極端に損なわれるので、輸送ものに依つて押えられがちな消費都市近郊の促成ものとして、有利性が保たれ、札幌近郊でも既に三十年近くの歴史があり、経営上極めて有利なものとなされ、更に増反の傾向が見受けられております。

ニラの葉には蛋白が二・七〇％位含まれ熱量も多く、一〇〇瓦中ビタミンA六〇〇IU、B₁、B₂、Cも含まれており、極めて栄養の高いもので、特有の臭気があります。これは胡油（硫化アリル）の一種といわれるものです。ニラは中国では旧くから利用され、わが国でも保健上重要な野菜として旧くから利用されて来ました。

ニラの栽培は極めて容易なものです、一般に行われているフレーム促成でも、硝子障子、看板等多くの資材を必要とし、種株養成に一二年もかかり、収穫後は夏中種株の肥培のため、他作物の栽培は出来ません。また冬季の農閑期の労力の利用の点から有利なものであります、フレーム被覆作業にかかる二月中下旬は、普通二尺以上の積雪があり、三月の中旬頃迄は一夜で

尺余に達する降雪を見ることがあるので、除雪の手間を相当見なければならぬ等の点から、札幌近郊ではフレーム面積で、一反歩位が最高の経営面積となつて居るようです。

一 ニラの品種

品種名のついたものはありませんが、普通一般に作られている小葉のものと、東北地方原産の広葉（大葉種）の品種があり、大葉種は特に促成用に注目されております。温室の促成で三回目の刈取時期の広さが、小葉の一回目の広さに匹敵するといわれ、極めて発育が旺盛で収量も多い。唯大葉は香気に乏しい恨みがあるけれども、むしろ促成ものとしては時期の関係で、特有の香気のうすいものの方が好まれるので難点にはなりません。

一般に市販されている大葉種は、実生すると分離して多少小葉系が現われるようです。播種後二〜三カ月経つと、小葉、大葉がはっきり区別出来るので、心がけて間引すると実用上差支えありません。

二 繁殖方法

種株の繁殖方法として実生と株分けによる方法とがあつて、一般には仕事も容易な株分けが行われております。

実生方法は春融雪直後、四月中下旬葱の

播床と同様な床をこしらへ、坪当り五勺見当を播種するか、あるいは促成する位置に、所定の株間をとつて坪播する方法がとられております。大体播種後二週間前後で発芽し、六月下旬から、七月始めにかけて混んだ処を間引いて肥培すると、秋迄には二〜三本に分蘗します。発育の程度にも依りますが、秋定植して翌年は株の培養につとめる事になるので、翌年からフレームをかけた収穫を始める事も出来ます。

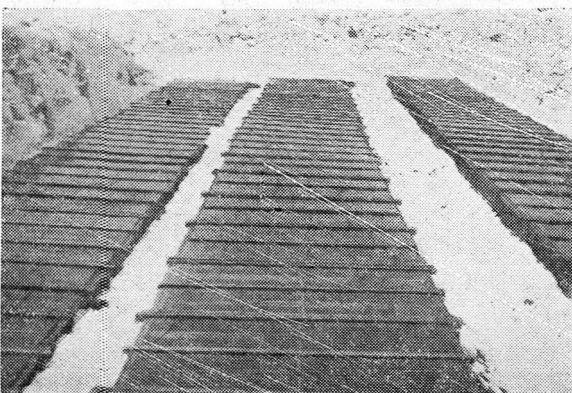
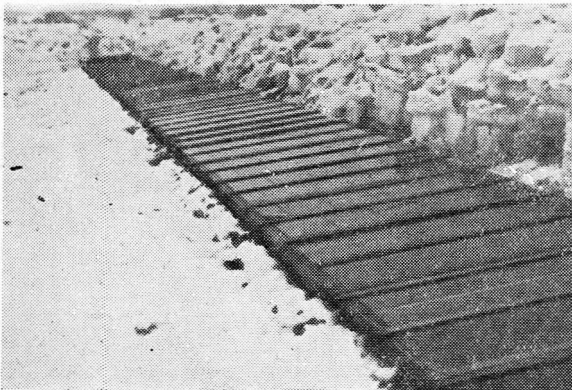
株分けの方法は、大体何時行つても差支えないものですが、促成を早めるためには九月から十月半頃迄に行つた方が良いでしょう。先ず古株を掘起して、大体一握り程度の大きさに株を切割つて植えます。このような大ききの株を植込むと

翌春からフレームをかける事も出来ませんが、初年目の収量は実生翌年のものを利用したものと同様少ないものです。

三 植込みの要領

地下水が低く風当りの少ない場所をえらび、反当り堆肥五〇〇貫し一、〇〇〇貫を鋤き込み、長さ六尺の硝子障子をかけるようペットをこしらへ、少量の下肥、木灰を施して、畦幅一尺に株間六寸〜八寸の一畦九株〜七株の正常植とします。前にも述べたように植える株の太さは、ために植えた方が収量は多くなります。四〜五年にわたりのそのまま株を利用すると、株が高くなつてはきますが、太くなりすぎるような事はありません。

雪を割つての温室促成栽培の状況



か、ベツトとベツトの間を稍広めにあけておいて、活着迄浅植して、秋遅くにベツトの間の土を掘上げ覆土する事も考えられます。温室促成と異つて、フレーム促成では生育中に肥土を覆土する事は容易でないで、成可く深植えとした方が良いでしょう。深植えは価格の点で有利な白根の収穫が出来るばかりでなく、葉先が地上に現われてからの發育は浅植えのものより良いようです。

植付け後二〇日位経つて葉が動き始めると、鶏糞を始め下肥を多量に施用します。ニラは多肥に耐え、施肥量の多い程結果の良いものとされておりますが、植込み時に多肥するとやはり植傷みが出るので、寧ろ畑の肥えている処では定植の際無肥で植付け、活着後施肥した方が良いでしょう。施肥量は反当成分で窒素六貫、磷酸二五貫、加里四貫位を要するといわれ、主として自給肥料で補うのが得策であります。

四 フレームに依る促成

促成開始の時期は融雪との時期にもらみ合せ、二月中下旬頃で、それ以前に始めるのも可能ではありますが、除雪等の作業から見ると容易ではありません。

先ず積雪を割りベツトを出し、框板でかこみ硝子障子をかけます。始めは少くともベツトの周囲二〜三尺は除雪すべきで、出来る丈早く周囲にヨシズを廻らし風を少しでも避けるようにし、保温のためには床内の地面にビニール被覆すると効果が大です。このように保温すると間もなく發育を始めて来ます。ニラは大体日中一〇度C前

後になると發育を始めるといわれています。硝子障子の上はヨシズを覆う。この頃はまだ降雪があるので除雪にも好都合ですが、日中のチラホラ程度の雪にはつとめてヨシズをはぐようにした方が保温上良いでしょう。管理として特別な作業はありませんが、何と云つても難作業は除雪で、日中二〜三回位障子上の雪は払いおとすようにすべきです。障子の骨は普通のもので

割合丈夫で、尺余の降雪にもそう傷むものでありませんが、新しくこしらえる場合は多少丈夫にしておいた方が良いでしょう。天候は左右されますが一般に障子被覆後二〇日〜三〇日位で、六〜八寸に伸長するのでその頃第一回の刈取りを行います。

五 収穫

収穫調製は簡単で、ミツバやセリと異り多少の選別を行えば水洗いの必要もなく、白根をつけて刈取り一把一〇匁位に束ねて出荷します。第一回の刈取後二〜三日で第二回の刈取が出来ますが、第二回目になると価格も下つて来るので二〇〜三〇匁の束にします。第二回目の刈取後同じく二〜三日すると三回目の刈取を行う事が出来ます。三回目になると葉は細くな

り品質も落ちて来るので四〇〜五〇匁の束として出荷し、後半には露地ものもボツボツ出始めるようになるので、フレーム被覆を打ち切り、以後刈取りを行わないようにして次年度のために、種株の發育を促つた方が良いでしょう。

札幌を例にとると大体の市場出荷価格は、第一回の収穫で一貫七〜八〇〇円位、第二回は五〜六〇〇円前後、第三回目はかなり安くなるようです。収量は二〜三年の發育盛期の株で坪当り一、二回の収穫の時二貫匁位、三回目になるとその六分位の収量になります。

温室促成の大葉ニラ（第三回目の刈取始め）



六 収穫後の手入れ
ニラの根は細長い鱗茎があつて、その下部は根茎となり秋迄に密に伸び、貯蔵養分を貯え春先の生育を促すことになります。促成の場合は短期間に三度も刈取りを行いその間、養分の吸収は考えられないから、三回目の刈取り頃は株は衰弱しているものと考えなければなりません。農家の中には価格が良いからと夏迄に、更に一〜二度刈取りしているのを見受けられるが、これは止めて種株の培養を図るべきでしょう。

五月の上旬から六月の始めにかけて、深めに中耕し、肥料分を吸収し易くして、鶏糞坪当り一貫目、下肥一〜二貫目施して、種株の發育を図り、秋迄に二回位下肥を追肥してやると、秋には根茎に充分養分が貯えられます。なお八月始めに抽臺して来るから、開花始め頃に花茎のみを刈取るようにします。株が高くなつたような場合秋末迄に肥土を株間に入れる事も大切な作業です。

七 温室促成について

ニラの温室促成はフレーム促成の困難な厳寒時にも容易に行なえ、温度も二〇度C以下の保温で良く、二五度C以上の温度では株が腐敗するといわれています。収穫も一月から行えるので、価格も一、〇〇〇円から一、五〇〇円（一貫目）と極めて有利であります。

種株の養成はフレーム促成の場合と殆ど同じですが、実生や、株分け後は翌年一年間養成しなければ、温室に入れる事は出来ません。温室に入れる時期は、一度低温に遭い休眠に入った十二月始め頃から中頃で、雪を割つて五寸角位に丁寧に掘取りますが、大体根は密に組んでいて土はおちないものですが、これを隙間のないよう、そして表面は凹凸のないようにベツトの上にならべ、予め用意しておいた床土を一〜二寸覆土します。

伏込みが終わると微温湯を坪当り一斗位灌いで、発芽迄ビニールを覆つて置き、二〇日位して七〜八寸に伸びたならば収穫を始めます。やはり刈取りは三回位で爾後は品質が落ちるので打ち切りにします。

（雪印種苗・上野幌育苗場）